

学校における学習 — 3 —

飯野 晴 美

I. はじめに

「這えば立て、立てば歩めの親心」といわれる。親が子どもの発達を期待し、願う姿を表したものである。この時期の子どもは、こうした周囲からの強い期待がなくとも（全く期待がないと問題ではあるが）、日々自分のできることを繰り返し、次のステップへと進んでいく。伝い歩きができるようになった子どもは、それができる場所を求め、挑戦する。歩き始めた子どもは、這うほうが速く移動できるにもかかわらず、基本的には歩く。ころんで痛い思いをしても、歩くのを止めて這おうとする子どもはまずいない。人間には、基本的に新しく得た自分の能力を伸ばそうとする欲求があるのかと思える。

学校で何を学ぼうとして、生徒や学生は進学しているのだろうか。子どもたちが希望して、高等学校や大学へ進学したはずなのに、いつの間にか「勉強をやらされている」「出席を強制されている」という態度が鮮明にみられる学生がいる。グループ学習にすると、積極的に関わる学生とサボりきっている（やっていますというポーズだけはしっかりしている）学生とに分かれてしまう。幼いころに見られた、自分の能力を伸ばそうとする欲求はどこに消えてしまったのであろうか。

少子化が進み、進学に苦勞を必要としなくなりつつある今日において、学校における学習が、生徒や学生にもたらすものについて、飯野（2018, 2019）に続けて考察をする。

Ⅱ. 学校の存在意義

幼児教育の無償化が本格化し、義務教育期間と準義務教育期間を合わせると15年となった。在学期間の長期化は着実に進んでいる。その一方で、不登校の児童や生徒に関わる問題はなくならない。それどころか、引きこもりやニートの問題は、もはや子どもや青年に特化した問題ではなくなっている。学校に通うことは、どのような意味があるのであろう。

工藤（2018）は、日本の学校において行われている教育活動について疑問を呈しつつ、学校の存在意義について次のように述べている。

学校は何のためにあるのか――。

学校は子どもたちが、「社会の中でよりよく生きていけるようにする」ためにあると私は考えます。

そのためには、子どもたちには「自ら考え、自ら判断し、自ら決定し、自ら行動する資質」すなわち「自律」する力を身に付けさせていく必要があります。

山田（2007）や新井（2018）は、学校教育をその後に控える社会人生活とのつながりから考え、その存在意義を述べている。学校は、生徒や学生のスクリーニングとして存在していると考えている。両名の考えは、次のとおりである。

近代の「学校教育システム」は、職業に就くためのリスクを軽減するように発達したものである。職業学校を始めとして、あるレベルの学校を卒業すれば、特定の職業に就く見込みが高くなる。企業や社会の側も、学校

を出ている若者の仕事能力を予測しやすい。個人（多くはこれから社会に出る若者）と企業等の間に入って、職業に就く際のリスクをコントロールすることが、「学校教育システム」に期待されてきたのである。学校による進路振り分けは「けしからん」という意見もあるが、学校によって振り分けられているおかげで、若者は、仕事に就けないリスクを回避できていたのである。（山田，2007）

日本で近代社会が成立した明治時代以降、文部省や、大学の先生たちが何を考えて今の大学入試制度を作り上げてきたのかは別として、大学入試にははっきりとした機能があります。「当たり前じゃん」と言われそうですが、それは学生のスクリーニングです。ホワイトカラーとして社会に送り出すとき、この学生はどの程度の能力があるのか。その能力を測る指標として大学入試は機能しています（新井，2018）

一見すると異なる見解に見えるが、いずれも①大人になった（成人後の）時期を考え、②社会人としての生活、を視点においている点が共通している。学校は、「子どもたちにとって〈今の生活を楽しく充実させる〉とともに、〈将来（大人になったとき）に役立つものを提供する〉場である」と、考えられる。

Ⅲ. 学校教育の目的と方法の取り違え

現代の学校において行われていることを見ると、疑問に思われることや矛盾点が多々ある。子どもたちに「自律」する力を身に付けさせていく必要があるという工藤（2018）は、「今、日本の学校は自律を育むことと、真逆のことをしてしまっているように感じます」とし、次のように続けている。

手取り足取り丁寧に教え、壁に当たればすぐに手を差しのべる。けんかや対立が起きれば、担任が仲裁に入り、仲直りまで仲介する。そうして手厚く育てられた子どもたちは、自ら考え、判断、決定、行動できず、「自律」できないまま、大人になっていきます。

そして、大人になってからも、何か壁にぶつくと「会社が悪い」「国が悪い」と誰かのせいにしてしまうのです。

教員たちによる「親身の指導」や「丁寧な対応」が子どもたちの「自律」を阻んでいることがある、ということである。また、山田（2007）は、子どもたちを思って学校がとっている対応について、次の疑問を呈している。

現代の日本の状況は、青少年に対し、苦勞やつらさに対する免疫をつけるという機能を失っている。苦勞にも二種類ある。免疫になる苦勞は、将来につながる苦勞であり苦勞を乗り越えて報われるという体験に基づく。一方、免疫にならない、よくない苦勞とは、将来につながらない、無駄な苦勞である。

近年の学校教育は、「ゆとり教育」とか「受験競争悪者論」、更に、「競争自体がよくない」という形で、将来につながる苦勞を否定し、空しい苦勞だけさせる（画一的な規則に従う、友人や先生に気に入られる、いじめっ子に反抗しない、目立たないように努力する）傾向が強まっているのではないか。運動会で、一等賞を出さない学校も実際に存在する。差をつけるのがよくない。ビリの子がかわいそうだといって、賞品をなくしたら、いったい何のために努力したらいいのか、子どもは分からなくなるだけである。

また、「読解力」の不足に危機感を抱く新井（2019）の見解を、次にあげる。

生徒同士が話し合ったり、意見を述べたりするアクティブラーニングが近年重要視されるようになり、それに充てる時間を捻出しなければならなくなったはずですが。すると、板書を写させるよりも、ノート代わりにプリントを配布させるほうが、効率が良い。こうして全国に穴埋めプリント学習が広がっていったのでしょうか。

結果的に、それが生徒の読解力を下げた、とは考えられないでしょうか。私のこの見立てが正しければ、「新しい時代の教育」として文部科学省がアクティブラーニングを強調し、教員がよかれと思ってプリント作りに精を出した結果、プリントに頼り、ノートが取れず、教科書が読めない生徒を増やした可能性があります。

大学生が行う模擬授業においても、ワークシート（プリント）の活用が多く見られる。ワークシートといっても教科書に太字で書いてある言葉を中心にまとめたものがほとんどである。ワークシートさえ作成すれば、模擬授業の教材研究が十分にできていると勘違いしているように、筆者には思える。しかし、生徒役になっている受講生のほとんども、ワークシートさえあれば、分かりやすい授業であると感じるようである。「ワークシート（プリント）中毒」ともいえるような現象が、大学生にも蔓延しているように感じられる。それに反するようには、メモやノートをとる習慣が身につけている学生は減りつつある。プリントを配ると、筆記用具さえ手にせず、プリントを眺めている学生がいる。プリントに記載されていないことを補足説明しても、メモにとる様子は見られない。

ワークシートやプリントの多用は、「過ぎたるはなお及ばざるがごとし」ということである。教育する側の、見通しの甘さ、浅はかさともとれる。教員自身が、目先のことしか眼中になく、長い目で見たときの効用まで考えが及ばないのかもしれない。人間観や発達観といった、人間に関する教養が不足しているとも考えられる。

Ⅳ. 大学におけるおける講義から見えてきたもの

筆者は、教職課程の必修科目として教育相談に関する講義を担当している。受講生は主として大学3年生で、4年生もいる。教員が生徒や保護者を対象とした相談活動を進めるにあたり、生徒の行動に関する基準を理解していることが重要である。例えば、中学1年生であれば何ができて当然であり、何ができなくとも問題にならないか、ということである。

表1に挙げた30項目は、学校生活を送るうえで、身に付けていないと困る時があると、筆者が思うものである。この30項目について、受講生を数名のグループに分け、「いつまでに身に付けておいて欲しいか」をディスカッションしてもらった。「小学校入学時までに」「小学校の低学年までに」「小学校中学年までに」「小学校高学年（卒業）までに」「中学校（卒業）までに」「高等学校（卒業）までに」「大学（卒業）までに」からのカテゴリーである。

受講生にこれら30項目について小学校から高等学校までの時と比べて現在（大学生）の方ができなくなっていると思うことについて考えてもらった。コメントが多かったものをまとめたものが表2である。対人関係に関するものと、自己管理に関するものが多かった。

また、授業に関する感想ともいえる次のコメントが目をついた。「班（グループ）によって意見が大きく異なる質問があって、人によって価値観が違うことを感じる事ができた。明確な答えがないからこそ、教育の多様性、難しさがあると思う。」という、教科教育以外の難しさを改めて認識した受講生もいた。大学生生活の反省ともとれるコメントもみられた。「大学に入学して生活、学習態度について自由度が高まった分、一時的に楽な方へ、直前に対応する場合が増えた。習慣化の影響の大きさがわかる。」また、「今でも、全然できていない事」もあるようである。

表1 『いつまで（何歳）に、身につければいいでしょう？』

1	自主的に挨拶をする
2	人前で話をする
3	先生に伝言等の必要なことを話す
4	初対面のクラスメートと交流する
5	喧嘩をした後に、仲直りする
6	固定電話を受ける
7	固定電話をかける
8	チャイムで着席する
9	チャイムで授業の準備をする
10	授業と休憩時間のちがいを理解し、行動する
11	授業時のルールを理解し、行動する
12	15分ほど、集中して話を聞く
13	45分ほど、集中して話を聞く
14	自主的にノートをとる
15	配布物への対応をする
16	欠席した後の情報収集ができる
17	翌日の登校準備をする
18	自主的に学習をする
19	起床、就寝時間を自己管理する
20	持ち物を自己管理する
21	自室（コーナー）の整理や掃除をする
22	気候にあった服装選択をする
23	ひとりで買い物をする
24	ひとりで、公共交通を利用する
25	一日（今日）のスケジュールを管理する
26	葉書、手紙を書く
27	メールを書いて、送る
28	インターネットを使える
29	お小遣いを管理する
30	ひとりで入浴する

表2 受講生によるコメント

【対人関係に関するコメント】

〈2 人前で話をする〉

- ・人前で話するのは、昔は自分の思ったことを話すことができた（と思う）が、今は、他の人はどう思うかと考えることも増え、言いたいことがなかなか言えなくなる。恥ずかしさなども生まれてくる人もいると思う。

〈4 初対面のクラスメートと交流する〉

- ・昔の方ができていたのではないかと思います。もともとその頃は何も考えずに話しかけていました。しかし、今は、逆に考えすぎて話しづらくなってしまっています。
- ・昔は人見知りなどはなかったが、成長に伴って相手の状況や、心情、恥ずかしさなど、様々な感情が出て来てしまい、話しかけるのが難しくなってしまったから。
- ・初対面の人との交流は昔の方ができた気がします。それは、昔は特に何も考えていなかったから、自分からばんばん話しかけていたけれど、今は相手からどう思われるか意識してしまい、積極的ではなくなったのかと思います。

〈5 喧嘩した後に、仲直りする〉

- ・喧嘩したら仲直りするということは小学生の頃の方が出来ていました。理由としては、昔は喧嘩の原因をつきとめてお互い納得した上で仲直りしていたためです。しかし、今はただ謝る、表面的な和解を仲直りとしてしまっています。

〈6 固定電話を受ける・7 かける〉

- ・今できない。小学校低学年のときは遊びの約束とかを固定電話ですることが多かったが、だんだん携帯メールになって電話を受ける・かける機会がなくなったからだと考えられる。今ではできれば出たくないし、固定電話にかけるのも嫌だ。
- ・固定電話へかけることは小学校の時や中学校の時にはできていたが、最近は少し難しくなっている気がする。それは、スマホ、メールの利用によってそもそも「電話をかける」ということ自体が少なくなり、特に誰が出るか知らない固定電話は嫌になってきたと思う。

【自己管理に関するコメント】

〈8 チャイムで着席する・9 チャイムで授業の準備をする〉

- ・私の小学校ではチャイムがなかったが、チャイムがなくても絶対各自授業時間には着席していた。しかし、大学になると多人数の教室だと特におくれても先生も何も言わないから、おろそかになってしまっているところはある。
- ・自己責任で行動することが増えて、判断の基準が甘くなってしまっている。小、中学校では先生が指導していたことが、今になってなくなったためと考える。

〈12 15分ほど・13 45分ほど，集中して話を聞く〉

- ・教室が大きくなって別にサボっていてもバレないや携帯を触っていても言われないという誘惑から集中できなくなってしまったと思います。
- ・大学の授業でも，席を立つ人をよく見ます。なぜ出来なくなったのか考えてみると，義務教育ではなくなったからではと思います。高校の時も，寝ているクラスメイトを多く見かけました。

〈14 自主的にノートをとる〉

- ・レジュメで配られることが増えて，ノートを持ち運ばなくなった。先生の板書が減り，口頭での説明が大半を占める授業が多くなったので，どれを書けばいいかわからない。

〈17 翌日の登校準備をする〉

- ・翌日の持ち物は当日にならないと準備しない。アルバイトや遊ぶことが遅い時間となり，夜翌日のことまでできなくなったから。
- ・翌日の準備は以前と比べて疎かになりました。テキストが必要な科目も減ったし忘れてもその場でなんとかなる時も増えたのが理由だと思います。
- ・準備にかかる時間を見極め，前日から準備が必要か考えることができるようになった。
- ・翌日の登校準備はしなくなった。夜の帰宅時間が遅くなったことと，いつも時間ギリギリなくせに，朝やれば間に合うしと謎の自信を持つようになってしまったため。昨日の夜，やっておけばよかったと後悔しょっちゅう。
- ・朝の自分で使える時間ができたり自分でその日の時間管理ができるようになって当日準備することが多くなってしまった。

〈18 自主的に学習をする〉

- ・高校までは宿題や連合会の定期テストがあったため，定期的に復讐すれば楽に勉強できると分かり，自習をたくさんしていた。しかし，大学に入ってから，2回しかテストがないので，それを余裕に感じ，ほとんど実習をしなくなった。
- ・小学校，中学校，高校では，その授業内容がテストや受験につながるため，必死になって集中して話を聞いていたが，大学になって要点だけ聞くとするような効率性を覚え怠けるようになってしまった。

〈19 起床，就寝時間を自己管理する〉

- ・私は小さい頃，起床就寝時間は必ず9時に寝て7時に起きると決めて過ごしていたけれど，年が上がるにつれて，起床時間，就寝時間共にバラバラになった。高校生まではある程度できてはいたが，大学生になり，自由な時間や余裕ができたことで，このようになったのではないかと思う。
- ・起床就寝時間を自己管理することができなくなってしまっていると思いました。忙しくなってくると，どうしても時間に関しておろそかになってしまいます。

この30項目の多くは、小学校卒業までに身に着くように、教員や保護者がしつけをするものである。その後は、生徒が自己管理できるようになってほしい。現実には、他律（しつけ）から自律（自己管理）への移行が、うまくできていないように感じられる。大人たちから言われなくとも、自分で管理するものであるという自覚をもっているものがどの程度いるのか疑問である。抽象的に問えば、自分はできていると考えているものが多いと思う。しかし、具体的な行動をあげると「あれ？」となる。客観的に自己の行動を眺めることが少ない。自己客観視ができていない証であるのかもしれない。

「自立と自律」これを、大学を卒業するまでに身に付けてほしいと、筆者は考えている。だから、学年が上がるにつれ、受講生の自律性を重んじるように対応している。しかし、残念ながら、大学生の自律性は年々低下傾向にあるように感じられる。

V. 現実を見つめる

普通教育が行われている、小、中、高等学校では、学習指導要領に基づいた教科教育が実施されている。だが、その内容が確実に児童、生徒に習得されている保障はない。進学さえすれば、知識や技術が身に付き、思考力や判断力が高まるとは限らない。

教師としての経験から、諏訪（2007）は次のように述べている。

普通の教師は、頭のいい子と頭のよくない子がいることを知っている。もちろん、こういう事実を公的に発言すると、いまや世間から指弾され、首もあぶなくなるからみんな公言したりはしない。しかし、教師たちの内々の話では、できる子とできない子がいることは公然の秘密である。それに勉強の好きな子と嫌いな子がいるし、やりたくない子とやりたい子が

いる。これが事実であるし、教師はいつもそういう事実に出会っている。どの子にも同じようにいい点を求めたりしない。

もちろん、教師は子ども（生徒）に勉強をさせようとするし、授業に参加させようと工夫や努力をする。子どもたちの学力がどうなってもいいと思っははいない。だから、どんな子どもに対しても、その学年（年齢）に見合う最低限の知識や学力を身につけさせようとする。この点については押し付けと言われても、何とか子ども（生徒）にクリアさせようがんばるものである。

だが、みんながよくできるようになるとは思っていないし、みんなによい点を取らせようとするわけではない。学業に対していかげんな子ども（生徒）には注意をするかもしれないが、点数が低いことで叱ったりはしない。

また、生徒の保護者（親）のなすべきことについても言及している（諏訪，2007）。

本当に親が配慮しなければならないことは、（かわいい我が子をグングン伸ばしてやりたい）ではなく、できうる限り社会的に一人前のおとなに成れるように配慮することであり、我が子がグングン伸びるタイプかそうでないかを見定めてやることであろう。親の思い込みを押しつけることはできない。

「子どもたちには、その能力に違いがある。」この現実には、学習指導要領を設定するにあたって、全く考慮されてはいないようである。

また、人工知能が実用化されつつある現代、人工知能にとってかわられる職業が話題に上っている。新井（2018）は、「AIに代替されない人材とはどのよ

うな能力を持った人なのでしょう。それは、意味を理解する能力です。」と述べている。しかし、意味を理解せずに、やり方だけを身につけている大学生の多さに危機感を抱いている。新井（2018）は、次の一例をあげている。

「1, 3, 5, 7 の平均はいくつか」と問われると、日本では大学進学希望の高校生のほぼ100%が $(1+3+5+7) \div 4=4$ と正しく答えることができます。国民の半分以上が平均の公式を運用できる国は、日本とシンガポールくらいしかないかもしれません。では、その平均の意味はわかっているのでしょうか？

次にあげた【問題】（大学生数学基本調査にある問題）の正解は、②だけである。新井（2018）によると、「大学生の4人に1人は正しく答えられませんでした。公式は知っている、でも意味はわかっていないのです。」ということである。理解することとできることの違いを分かっていない例であろう（飯野、2009、2010）

「いろいろな子どもがいる」、公立の小・中学校に勤務する教員の多くが口にする言葉である。この言葉には、諏訪（2007）と同じ思いが込められているように思われる。

【問 題】

ある中学校の3年生の生徒100人の身長を測り、その平均を計算すると163.5cmになりました。この結果から確実に正しいと言えるのは、次のうちどれでしょう。

- ① 身長が163.5cmよりも高い生徒と低い生徒はそれぞれ50人ずついる。
- ② 100人の生徒全員の身長をたすと $163.5\text{cm} \times 100 = 16350\text{cm}$ になる。
- ③ 身長を10cmごとに「130cm以上で140cm未満の生徒」「140cm以上で150cm未満の生徒」…というように分けると、「160cm以上で170cm未満の生徒」が最も多い。

VI. 人間の発達から見つめる

ピアジェは、認知機能の発達を、感覚運動段階・前操作段階・具体的操作段階・形式的操作段階の4つのステージに分けた。子どもが発達するプロセスを見てみると、ピアジェの発達段階の順序は納得できる。しかし、すべての子どもが最終ステージの形式的操作段階に達しているのかは疑問に感じることがある。日常生活を過ごすためには、具体的操作段階まで発達していれば十分であろう。同様に、形式的操作段階の認知能力を常に必要とする職業はごく一部であり、多くの職業においては、具体的操作段階の認知機能で果たせる仕事内容なのではないだろうか。ごく一部分あるいは一時期だけ、形式的操作段階の認知能力が必要とされる。したがって、このような職業（職場）においては、一部の人が形式的操作段階にまで発達していれば、支障はない。いわれたとおりに、前例どおりに、マニュアルどおりに行えばいい仕事であれば、形式的操作段階の認知能力はなくてもできよう。

大学への進学率が50%を超えた現在の我が国において、大学生といっても形式的操作段階まで発達を遂げていないケースも考えられる。「○○ができない大学生」と疑問視されることがあるが、それは教育の問題というより、人間社会が本来内包していることが、表面化したことではないだろうか。「教科書が読めない子どもたち」も、教育方法にその原因があるケースと発達段階に伴う現象が混在していると推察できる。

VII. おわりに

近年の我が国における社会的な変化について、山田（2007）は次のようにまとめている。

「量的格差（経済的格差）」は「質的格差（職種やライフスタイルの格差、ステータスの格差）」を生み、そこから「心理的格差（希望の格差）」につながるのである。特に、時代変化に敏感で、不安定化の影響を真っ先に受けている若者たちの中には、未来に対する不信感、そして、将来の自分の人生に対する絶望感にとらわれるものも多くなる。

ここ数年、増大するフリーターにインタビューやアンケート調査を行った結果からみると、「組織に縛られず、好きなことをして楽しく生活する自由人」というよりも、「将来の不安におびえているが、その不安を感じないために、実現可能性のない夢にすがっている」という姿が見えてくる。

筆者も、確固たる裏付けのない自信（架空の自信、妄想）を学生たちが持っているように感じることもある。例えば、大学の推薦さえもらえれば、就職採用試験には必ず合格すると思っている。その理由は、これまでに、不合格になった先輩はいないから。教育実習校の受け入れが決まれば、実習に行くために必要な科目の単位は必ず認めてもらえる。あるいは4年生の最終学期であれば、単位が取れないことはない。先生が大目に見てくれるからが、その理由である。これまでと同じ状況が続くと信じて疑わない、「自分だけができていない」とは決して思わない。見通しが甘いのか、危機を想像すらできないのかは定かではない。さらに、安易な自信を喜んで受け入れ、助長する大人たちも少なからずいる。目の前に存在する問題を素通りし、面倒なことには巻き込まれない方が、大人たちにとっても楽で安易な選択肢であるからであろう。

対人関係に関する問題も、学校教育にとって避けて通れないことである。山田（2007）は、社会的引きこもりについても、次のようにコメントしている。

個人主義が進んだからでも、家庭が崩壊したからでもない。刑罰が軽いからでもない。苦労や大変さに耐える力（＝希望）が持ちにくくなってい

るからなのである。一見、家庭の教育力の低下や個人主義の浸透の結果起きたように見えるものは、実は希望なき社会の結果として生じたものと解釈できる。

進学率の上昇は、メリットだけではなく、デメリットもある。学校という「(主に) 同年代だけの守られた空間」に長期間いるため、厳しい現実を目を向けることができなくなっている。現実には気づかないともいえる。とりあえず、日々言われたことをしていればいいと、いうことなのだろう。大人になるために必要なことを真剣に考え、それに合った学校教育を行う必要がある。「大人になる自覚」「発達していく自覚」を子どもたちに持たせることが、学校教育における最重要課題であると筆者は強く思う。具体的な how to だけを教えることに特化した教育にならないように。

景気の動向にかかわらず、子どもたちの養育や教育に関わる費用は減少しにくい。「少子化」と社会問題として取り上げられるようになってから久しい。子ども一人を育てるためにかかる費用負担の増大が、その一因と考えられている。「少数の子どもに潤沢な費用と大人の手間をかけて、大切に育てたい」と考える人々が増えている。これは、手間とお金をかければ子どもの能力を芽生え伸ばすと信じている人々が多いのであろう。その一方で、多くの子ども同士の中でのみ鍛えられていく力や、大人の手が十分にかけられないことによってこそ育まれる力が存在することが、忘れられている。依存から自立へ、他律から自律への問題であろう。

美しい言葉で高尚な目標を掲げているだけでは、教育本来の役割を果たすことは難しい。社会の変化が激しく、先の見通しが難しい今日、希望を失うことなく、現実をしっかりと認識する目を一人ひとりが養うことが大切である。

文 献

- 新井紀子 2018 AI vs. 教科書が読めない子どもたち 東洋経済新報社
- 新井紀子 2019 AIに負けない子どもを育てる 東洋経済新報社
- 飯野晴美 2009 理解のレベル 明治学院大学教職課程論叢 人間の発達と教育 5
61-82
- 飯野晴美 2010 理解のレベル－2－ 明治学院大学教職課程論叢 人間の発達と教
育 6 55-68
- 飯野晴美 2018 学校における学習 明治学院大学教職課程論叢 人間の発達と教育
15 35-48
- 飯野晴美 2019 学校における学習－2－ 明治学院大学教職課程論叢 人間の発達
と教育 16 31-45
- 工藤勇一 2018 学校の「当たり前」をやめた。時事通信社
- 諏訪哲二 2007 なぜ勉強させるのか？ 光文社
- 俵原正仁&原坂一郎 若い教師のための1年生が絶対こっちを向く指導！ 学陽書房
- 宇野弘恵 2016 スペシャリスト直伝！ 小1担任の指導の極意 明治図書
- 山田昌弘 2007 希望格差社会 「負け組」の絶望感が日本を引き裂く 筑摩書房